

「備急千金要方」に記載された歯病について

第1編「備急千金要方」に関する書誌的考察*

戸 出 一 郎**

序 言

孫思邈の「備急千金要方」(以下「千金方」)は、王燾の「外台秘要」と共に、唐代を代表する医書である。「千金方」は漢から六朝時代、隋、初唐の医論や遺方を集録し、著者の創見も加えて成り、その内容は、病理、湯液、針灸、養性、服餌、按摩、調気、房中、呪術等にわたり、実用を旨として簡明に編纂された医学全書である。

本書は、歯病を一項目として記載した医書のうちでは、日中を通じて最も古いものである。

「千金方」以前に歯病を一項目として扱った医書は、隋・巢元方の「諸病源候論」があるが、本書は病理の書であって治法はない。更に古くは、隋・煬帝の「四海類聚方」二千六百巻など、或は歯病の項目があったかも知れないが今日に伝わらない。

「千金方」は後代に大きな影響を与え、唐・宋の医書は殆どその様式を踏襲した。我国でも「医心方」は「千金方」とほぼ同様の分類がなされ、多くの条文が引用された。室町以後現れる口中書にもその残影が見られる。中国・日本で行われた口中医療に対する「千金方」の影響は大きいものであったと思われる。

上述の理由により、「千金方」の内容を検討し、歯科医史学における意義を明らかにすることは重要な意味を持つと考える。しかし本書の内容は膨

大であるから、本編では書誌学的考察に止めることとする。

著者 孫思邈の生涯

孫思邈の伝記は、「旧唐書」¹⁾ 卷一百九十一、列伝第一百四十一、方伎と、「新唐書」²⁾ 卷一百九十六、列伝第一百二十一、隱逸とに載っているが、「旧唐書」の方が内容は豊富で、「新唐書」はその省録と思われる。

そのほか、宋・李昉撰「太平広記」³⁾ 卷第二十一、神仙二十一、卷二百一十八、医一、卷第二百二十二、相二に載っているが、中でも卷第二十一の文は長文で詳細である。

また、五代・元代の神仙類、仏教関係書、古今の医学史、稗史、小説の類にも数多く見られ、かれが各方面でいかに有名であったかを物語っている。

孫思邈の生没年について山崎氏⁴⁾は、「旧唐書」に「開皇辛酉歳生、至今年九十三矣」とあるが、開皇辛酉は開皇辛丑の誤写であろうとされ、没年は永淳元年(682)と推定されている。開皇辛丑は開皇元年(581)で、彼は102歳の長寿を全うしたことになる。「新唐書」には永淳初年百余歳で卒したとある。

趙有臣氏⁵⁾も山崎氏と同様の説を述べられている。

「旧唐書」によれば、孫思邈は京兆華原(陝西省耀県)の人で、7歳にして就学し、日に千余言を誦し、弱冠にしてよく莊老および百家の言を談じ、兼ねて釈典を好んだという。また太白山に隱居して、学道・練氣・養形・天文・推歩(暦法の一種)・医薬などを修業した。彼は度世濟物の志

* On the Dental Diseases Mentioned in *Bei Ji Qian Jin Yao Fang*.

Chapter 1・Bibliographical Investigation on *Bei Ji Qian Jin Yao Fang*.

** Ichiro Tode

を持ち、仁慈の心厚く、陰徳を施し、内外の医薬の研究に努めたのである。「太平広記」巻二十一に、竜から竜宮の仙方三〇首を授り、これを「千金方」に散入したという寓話が述べられているほど超俗の人であった。

彼の隠逸の志の高かったことは、太宗に招かれ爵位を授けられようとしたが固辞して受けなかったことや、顕慶4年、高宗に招かれ、諫議大夫の地位を与えられようとしたが、これも固く辞して受けなかったことによっても知られる。

孫思邈の著書は「旧唐書」本伝に載るものだけで、老子注、莊子注、千金方三十卷、福祿論三卷、攝生真録、枕中素書、会三教論各一卷があり、その他千金翼方三十卷はじめ、多数の著書が伝えられている。

かれは道教の教学を深く究めた名道士であると同時に、優れた医師であり、儒仏の造詣も深く、暦学、天文、相術、予言にも通じていた。それゆえ「孫真人」と尊称され、後の世まで名高く、後世に大きな影響を与えたのである。

「千金方」の書誌

「新唐書」²⁾ 卷五十九芸文志に、「孫思邈千金方三十卷」とある。「旧唐書」¹⁾ 経籍志にはない。

「千金方」の成立年代について宮下氏⁶⁾は、「千金方」のなかに年月を明示した治験例があることから、永徽元年(650)以後、顕慶4年(659)までの10年間とされている。

大塚氏⁷⁾は、卷19腎臓の「腎臓脉論第一」に、「為後宮内官則為女主」(後宮内官となれば則ち女主となる)とあるが、これは永徽6年(655)の武后実現を暗示した文である見なして、「千金方」の成立年代を、永徽6年以後と考えられている。

趙氏⁵⁾によれば、従来の説では、「新修本草」「烏苧」の条の蘇敬の註に「千金方云、下石淋」という引用があるが、「千金方」卷二十六「食治」中、烏苧の条にこの文はないことから、「新修本草」に引用された「千金方」は孫思邈の著ではなく、范世英「千金方」であるとされていたが、「医心方」をしらべてみたところ、孫思邈「千金方」の固有内容に相異なく、それが現存の宋版

「新校備急千金要方」にないのは、宋代の林億等が校正するとき、改訂されたためであるという。この考証にもとづいて、趙氏は、「新修本草」が孫思邈の「千金方」を引用したことは明らかであるから、「千金方」は「新修本草」が撰成された顕慶4年以前に成立したものであり、更に「千金方」が流布され、人々に熟知される年数を考慮に入れて、顕慶以前の永徽年間に成立したと推定され、また北宋の葉夢得「避暑録話」に基づき、「千金方」の成立年を永徽2年と断定された。

趙氏は更に、「真本千金方」並に清・陸心源架蔵の「新雕孫真人千金方」の両書が、編次、内容に於て宋版とかなり相異があることをあげ、林億等が校訂する際、「烏苧、下石淋……」の条文を改訂した傍証とされている。

上述の「新雕孫真人千金方」は現在静嘉堂文庫にあり、これを閲覧するに、同書の第二十二卷、果実第二の烏苧の条を見ても殆ど宋版と同じで、「下石淋」の文句はない。従って趙氏の所論はなお検討する必要があると思う。

筆者は「千金方」中に記載された年月に「貞觀中」とあることから、永徽元年以後に成立したもので、今のところ下限を定める根拠はないと考える。しかしその下限は、恐らく永徽元年からあまり遠くはないであろう。

日中を通じて現存する「千金方」には16種の伝本がある⁸⁾。そのうち最も古いものは宮内庁書陵部所蔵の「千金方」⁸⁾第一巻で、「経籍訪古志」補遺⁹⁾、並に「真本千金方」¹⁰⁾の多紀元堅の序文によれば、本書は遣唐使が持ち帰った唐鈔本を、鎌倉・室町時代にわたって和氣氏が書写したものである。この書は江戸末期に多紀元堅が書估英遵から購入し、天保3年(1832)、松本幸彦が「真本千金方」と題して影印刊行し、元堅が序文を書いている。

「真本千金方」は宮内庁蔵「千金方」と体式を全く同じくし、文字も酷似し、墨筆書入れ等も全く同様に模刻してあるが、朱印、朱文、朱点は写していない。また原本では、卷末の花押は別紙に影写したものを貼附しているが、「真本千金方」ではそのまま版刻し、貼附であることがわからな

い。また末尾に、「日本記鈔伝云上巻……」の一文があるが原本にはない。

刊本では静嘉堂文庫所蔵の「新雕孫真人千金方¹¹⁾」三〇卷24冊が最も古く、黄丕烈、汪士鐘、陸心源等の手を経て、明治42年我国にもたらされた。

本書は治平3年(1066)林億等が校訂するより前の刊本であるといわれる。しかし残念なことに巻6~10、16~20が欠けているが、欠落したところは元刊本と明・慎独齋劉氏刊行本をもって補填されている。

北宋の治平3年(1066)には林億等が聖旨を奉じて原本を校勘し、「備急千金要方」三十巻として国子監から鑄版施行された。

この宋版「備急千金要方」は中国ではすでに亡逸して見られないが、日本では米沢藩上杉家に金沢文庫旧蔵のものがあったが、昭和51年3月29日、文化庁へ移管され、現在は国立博物館に収蔵されている¹³⁾。

本書は各巻に数葉の脱落があるとはいえ、ほぼ完全な姿を止めた世界で唯一の宋版である。本書の刊行年については、江戸影本の攷異には、治平3年の刊本で、北宋の元祐及び南宋の乾道・淳熙間に補刊されたものだという。「経籍訪古志」補遺もこの説を踏襲している。しかし宮下氏⁶⁾は南宋紹興17年(1147)頃の刊本であるとされた。また関氏¹²⁾は南宋初年の刊とされている。

江戸影本に於ける多紀氏等の説は版式と欠画に基づく立論であるが、宮下氏は更に版心に彫られた干支と刻工名について精細な考証を加え、その検索の深さは他に比類を見ない。関氏は多紀氏の説を引用されたにすぎない。

この金沢文庫旧蔵本を、嘉永2年、江戸医学館の多紀元堅、多紀元昕、小島尚質等は、元刊本によって脱落部分を補正、校勘し、「影宋本千金方攷異」一卷を附し、原版の寸法に従って復刻し、官費をもって出版した¹⁴⁾。

この版木は、明治11年、中国の黄学熙に買いとられ、上海で再版されたが、版木の腐朽が多く、その部分を通俗本によって補足して出版された。そして1955年には、この景刊本に基づく景印縮刷

本が北京から、次いで1965年、台湾から刊行された。

昭和50年には、江戸医学館復刻の嘉永2年版が、千金要方刊行会と毎日新聞開発株式会社により影印出版された。

静嘉堂文庫蔵の「新雕孫真人千金方」と国立博物館蔵の宋版「千金方」との違いは、互に巻数が相異するところがあり、篇次の異なるものも多い。

静嘉堂本は宮内庁蔵「千金方」と内容序列や体式文字を殆ど同じくし、宋版「千金方」とは一致しない点が多い。

第六巻は、静嘉堂本は本文を欠くものの、目録は残存し、目録には、第六巻面方第一、(第二消失)、口方第三、舌(以下消失)、唇方第五、齒方第(消失)、喉方第七、耳方第八、とあるが、国立博物館蔵宋校本の目録では、巻第六上七竅病上、目病第一、鼻病第二、口病第三香附、舌病第四、唇病第五甲煎附。巻第六下七竅病下、齒病第六、喉病第七咽附、耳病第八、面病第九となっている。即ち、静嘉堂本は第六巻を上下2冊に分けないで1冊となっていたようである。また面方を第一とし、耳方第八までであるが、宋校本は目病を第一とし、面病を第九としている。

編題名は静嘉堂本は面方、齒方というように方としているが、宋校本は病としている。同様の例は他の巻編にも多い。

上述のように宋校本は、編次、病名が静嘉堂本と異なっているのである。本文の内容の違いは静嘉堂本の第六巻が逸失しているため比較することが出来ない。

鍼灸に関して静嘉堂本即ち、「新雕孫真人千金方」と、宋校本即ち、国立博物館蔵「備急千金要方」とを比較すると、静嘉堂本は、第三十卷玉函方附孔穴主対法、頭病第一、舌病第二、膝病第三、風病第四、癩病第五、雜病第六とし、各々に小字で注が附してあるが、頭病第一には、頭、面、目、鼻、耳、舌病第二には、齒、咽喉、臂、手、肩、髀、脚とある。これに対し宋校本では、巻第三十針灸下、孔穴主対法、頭面第一、心腹第二、四肢第三、風痺第四、熱病第五、癰瘤第

六、雑病第七、婦人第八とあり、注として頭面第一の下に小字で、項目鼻耳口舌齒咽喉附と書かれている。

それぞれの内容を比較すると、主病や経穴に改変があり、次序の変更、補入、削除が見られる。

江戸医学館影宋本は宋校本と同じであるが欠画を正したところがある。また巻第六下、齒病第六の注に宋校本では中三十八首とあるが多紀氏等は方三十八首と訂正している。

以上の諸点から、「千金方」は齒病に於ても、宋代に林億等によって相当改訂が加えられたことが明らかである。

「千金方」は元代にも宋本をもととして刊行された。その後、元刊本かそれと同系統の本が93巻に離断されて道蔵に収められた。道蔵とは道教の蔵書目録である。

明代になると、道蔵本「千金方」が流布したが、「経籍訪古志」¹⁰⁾に「其文譌脱頗夥」とあるように頗る粗笨であったため、京都の後藤敏(慕庵)が、木村蒹葭堂所蔵の元刊本を重刊して出版した。しかしこれにしても「経籍訪古志」は、「比之宋槧、脱誤甚多」と述べているように、満足すべきものではなかったから、宋刊本の復刻は世に待望されていたのである。

元刊本・道蔵本ともに、宋本と比較すれば、齒病並に鍼灸の頭面諸病にも、字句の相異や順序の錯誤がかなり見受けられる。

旧米沢本(現国立博物館蔵本)が多紀氏等江戸医学館の人達によって景刊されることになったのは、このような世人の要望があったからである。この書によって、既刊「千金方」の誤謬を正す点が少なくなかったから、多紀氏等の業績は内外から高く評価されたのである。

筆者は「千金方」に記載された齒病の考証にあたり、多紀氏等の江戸医学影宋本「備急千金要方三十卷」を主たる資料とし、他の諸本はこれを補足する意味で参考とした。その理由は既に述べた

ように、本書は宋版「備急千金要方」のほぼ完全な旧米沢本を祖本として、原本を忠実に模刻し、その上、欠落部を補正してあますところなく、実用面に於ては原本を凌ぐほどの出来ばえであり、しかも宋校本の面目を最も正しく伝えているからである。

稿を終るに臨み、文献の閲覧蒐集に御援助を賜った、鶴見大学図書館長中村初雄氏、同図書館講師吉田道彦氏、府川修次氏、小山高校長角井 宏氏、東京国立博物館の山本 清氏並に角井 博氏に対し厚く御礼申し上げます。また長年にわたり中国伝統医学を御教授下さった恩師岡部素道先生に対し衷心より感謝致します。

文 献

- 1) 旧唐書、図書集成印書局、上海、光緒14(東洋)
- 2) 新唐書、図書集成印書局、上海、光緒14(東洋)
- 3) 宋・李昉等奉勅撰、太平広記、明嘉靖45(東洋)
- 4) 山崎 宏：初唐の道士孫思邈について、立正大学文学部論叢50号、昭和49(東洋)
- 5) 趙有臣：「千金方」とその作者孫思邈に関する史的考察、日本医史学雑誌、26.2、昭和55
- 6) 宮下三郎：宋版備急千金要方について、米沢善本の研究と解題、1958.
- 7) 大塚恭男：孫思邈と「千金要方」の世界、漢方医学の源流、千金要方刊行会編、毎日新聞、東京、昭和49
- 8) 千金方、室町時代写、宮内庁書陵部。
- 9) 森立夫、澁江道純同識：経籍訪古志、補遺、安政3(東洋)
- 10) 千金方(真本)、天保年間、(国会)
- 11) 千金方 宋刊 配元明刊(静嘉)
- 12) 関 靖：金沢文庫図録上、東京、昭和10(玻璃版)(東洋)
- 13) 備急千金要方、宋版、(金沢文庫旧蔵、米沢上杉氏旧蔵、国立博物館蔵)
- 14) 備急千金要方、江戸医学館景刊本、嘉永2年、(静嘉)
(東洋)は東洋文庫
(国会)は国立国会図書館
(静嘉)は静嘉堂文庫